

彼の言つことを聞け

(マルコ9・2〜8)

一、高い山と光り輝く姿

マルコは、〈それから六日目〉と記すにあたって、何を考えたのでしょうか。旧約に照らししてみますなら、モーセが山に登ったという箇所が思い浮かびます。出エジプト記24章の記述です。

〈出エジプト24・15〜18〉 一方、三人が高い山に登ると、主イエスは彼らの目の前でその御姿が変わった。輝き、この世の職人には、とてもなじみ得ないほどの白さであった。とあります。ここも、モーセの姿と重なります。出エジプト記34章に、民が墮落してモーセが執り成し、再び契約が結ばれた後の出来事として〈出エジプト34・29〉それから、モーセはシナイ山から下りて来た。モーセが山を下りて来たとき、その手に二枚のさとしの板を持っていた。モーセは、主と話したために自分の顔の肌が輝きを放っているのを知らなかつた。とあります。おそらく、最初の目撃者であった。ペテロとヤコブとヨハネは、主イエスの光り輝く御姿に、モーセを思い起こしたこととされます。

二、エリヤとモーセが現れた

そしてエリヤとモーセが現れたとい

うのです。4節です。〈また、エリヤがモーセとともに彼らの前に現れ、イエスと語り合っていた。〉とあります。エリヤと言えは「預言者」預言者」を代表しているとも言えますが、ここでの意味は、当時のユダヤ人たちが主の日が来るとき、エリヤがやって来ると信じていたことに関係があるようです。エリヤについて主イエスは、バプテスマのヨハネこそエリヤだと言われました。13節です。〈わたしはあなたがたに言います。エリヤはもう来ています。そして人々は、彼について書かれています。おり、彼に好き勝手なことをしました。〉と。そついで、当時のユダヤ人にとってエリヤは、すべてを立て直すために神から遣わされる器でした。モーセについては、そのまま「律法」を代表していると云えます。ユダヤ人であった。ペテロとヤコブとヨハネにとってモーセは、まさしく聖書そのものでした。そして、モーセとエリヤが主イエスと語り合っていたというのです。ルカによれば、エルサレムで遂げようとしておられる最期について、話していただきました。弟子たちにとって、こんな神秘的な光景が見られるのは、一生の内に一度あるかないかです。ペテロはすっかり舞い上がってしまいました。同時に、主イエスに対する見方が、良くない意味で変わってしまいました。5節です。〈ペテロがイエスに言った。「先生。私

たちがここにすることはすばらしいことです。幕屋を三つ造りましょう。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。〉と。注意してください。ペテロは主イエスに「先生、すなわち「ラビ」と呼びかけています。六日ほど前は、「あなたはキリストです」と語ったのです。ペテロにとって主イエスは、「キリスト」から「ラビ」になってしまいました。そして主イエスとモーセとエリヤの三人を、自分たちのところに留めようとしてきました。これが、5節でペテロの語っている意味かと思われまふ。

三、「彼の言つことを聞け」

その時のことです。7節、8節です。

〈そのとき、雲がわき起こって彼らをおおい、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。彼の言つことを聞け。」彼らが急いであたりを見回すと、自分たちと一緒にいるのはイエスだけで、もはやだれも見えなかつた。とあります。雲は、神の臨在を表す雲でした。その雲の中から声がありました。まさしく神の声です。「これはわたしの愛する子。彼の言つことを聞け。」と。「これはわたしの愛する子」とは、旧約では神の代理者として立てられた王に対する呼びかけです。「彼の言つことを聞け」とは、まさしくこのテキストが語っているメッセージの中心です。

では7節の、「これはわたしの愛する子。彼の言つことを聞け。」を、前後関係から読み取るならどうなるでしょうか。きょう与えられた聖書の範囲をさかのぼって、8章31節になります。〈それからイエスは、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日後によみがえらなければならぬと、弟子たちに教え始められた。〉がそうです。神の子、すなわち神の代理者である主イエス・キリストが、罪人たちによって苦しみを受けられ、捨てられ、殺され、神によってよみがえらされるといふメッセージです。まさしく教会が信仰告白として語ってきたことばです。

コリント人への手紙第一15章3節、4節、5節に、〈私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであつて、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、また、ケファに現れ、それから十二弟子に現れたこと。〉とあります。使徒信条にも、〈ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人の内よりよみがえり、とあります。これこそ、「彼の言つことを聞け」の意味です。